

薬史学会通信

No 8 1989年3月

〒192-03

東京都八王子市堀之内 1432-1

東京薬科大学内

日本薬史学会事務局

日本薬学会第109年会(名古屋)

薬史学会ご案内

期 日 : 1989年4月5日(木)

場 所 : 名古屋市昭和区御器所町(鶴舞公園隣り)

名古屋工業大学 共通講義室棟 4階 (Q会場)

9:00~12:15

日本薬局方に見られたヨウ素製剤の変遷

東日本学園大・歯 松本仁人

日本薬史学会 ○山田光男

近代日本医薬品産業の発展 その4

JP5公布(昭和7年)より第二次大戦終結

(昭和20年)まで

日本薬史学会 ○山田久雄, 山田光男

日本薬局方の各版における根拠法について

日本薬史学会 末松正雄

蜘蛛類の民族薬物学的研究

熊本工大 ○浜田善利

熊本大・理(名誉教授) 吉倉 眞

日本の近代薬学成立の史的考察(第4報)

— 基礎と応用の接点 —

日本薬史学会 根本曾代子

ツベルクリン事始め

小山鷹二

星一言語録(その1)「親切第一」

星薬大 三澤美和

ヒポクラテスを医・薬の祖と呼ぼう

星薬大 柳浦才三

明治初期の薬業界に貢献した岸田吟香

東女医大病院・薬剤部 ○杉原正泰,

斉藤明美

日本薬史学会 天野 宏

わが国初の洋式目薬精騎水とその時代

日本薬史学会 ○天野 宏

東女医大病院・薬剤部 斉藤明美,

杉原正泰

薬の携帯とその容器の史的研究

藤沢薬工 ○服部 昭

東女医大病院・薬剤部 杉原正泰

医薬分業史に関する文献学的研究(第1報)

(書籍に示された医薬分業活動に関する考察)

日大・薬 中村 健, ○永喜美和子,

井元かおり, 平賀三千代

神学院・薬 藤井 正美

日本調剤学の創刊と発展

敗戦GHQの医薬分業勧告と調剤指針の誕生

日本薬史学会 中室嘉祐

13:00~13:30 日本薬史学会総会

13:30~15:30

シンポジウム「東海三県の薬業史」

岐阜の薬物史—伊吹と本草家

岐阜薬大 水野端夫

愛知の薬業史

愛知県薬剤師会 尾木 茂

三重県の薬業史

内藤記念くすり博物館 青木允夫

アメリカ薬史学研究所長に Gregory J. Higby 博士が就任。

アメリカ薬史学研究所 (Wisconsin 州 Madison 市) の所長に pharmacist-historian である Gregory J. Higby 博士が 1988 年 11 月就任した。任期は 1991 年の総会まで。

Higby 博士は Michigan 州 Bad Axe 出身で 1977 年 Michigan 大学薬学修了ののち、Glenn Sonnedecker 教授の指導を受けて Wisconsin-Madison 大学で薬史学研究に従事。1980 年に master 学位、1984 年に Ph.D. を授与された。同博士の主要業績は次の通りである。

1. “The adoption of the Metric System by the U.S. Pharmacopoeia”, Journal of the History of Medicine and Allied Health Sciences 40 (1985) 207 ~ 213.
2. “Heroin and Medical Reasoning: The

Power of Analogy” New York State

Journal of Medicine 86 (1986) 137 ~ 142.

3. “Professionalism and the Nineteenth

Century American Pharmacist.” Pharmacy in History 28 (1986) 115 ~ 124.

Higby 博士はアメリカ薬剤師会、アメリカ医学史協会、アメリカ歴史協会、科学史学会の会員でもある。

アメリカ薬史学研究所 1989 年総会は 4 月 8~12 日、California 州 Anaheim 市でアメリカ薬剤師協会が開催されると併行して、4 月 10 日に行われる。当日は同研究所提供の研究奨学金の発表 Forum が行われる予定である。

国際薬史学会が 1989 年 4 月 15~18 日、ギリシア、アテネ市で開催される。同学会に於てアメリカ薬史学研究所長 G.J. Higby 博士は、Urdang 賞を西独の Dietlinde Goltz 教授に贈呈する予定である。

日本薬史学会の旗見付かる



日本薬史学会が創立して間もなくの頃、本会創設者、三共株式会社の故山科撫作先生の肝入りで、本会の旗が注文製作されました。この旗は薬史学会主催の見学会などの折、集合場所の見印しとして使われていましたが、何時の頃からか行方不明となり、幻の存在になってしまいました。

ところが今回、薬学会館新築の儀がおこり、薬学会事務所一時移転のため物品整理をしている際に本旗が見付かり、芳川庶務課長から薬史学会事務局に転送されてきました。

実物は尖頭長方形で、縦の長い部分は 67 cm、横巾 34 cm 絹製、マークと日本薬史学会の文字が、青地に白の染め抜きとなっています。マークは PHJ の組み合わせで、どなたのデザインによるものかは判っておりません。

今後、できるだけ多くの機会に、会員各位の結集の目印になってもらいたいと考えております。 (K)

(6) 律令制下の受容

宗 田 一

奈良・平安時代は、律令制の国営医療であった。

律令制は、日本の古典文化形成の母胎だが、これを世界史的にみれば、朝鮮半島の同時的律令制とともに、中国王朝秩序内部における古代東アジア的世界形成だった。

この形成にあたって、律令制と仏教が担った役割は、西の古代ローマ帝國的秩序内部に成長した、諸民族の文明におけるローマ法とキリスト教の役割に比せられる。

この古代東アジア世界においては、律令制と仏教を継受・受容することが、国際的に認められた文明の指標で、世界的秩序に対するそれぞれの王権の自己確立の過程として結実したものだ。

だから、その体制は、それぞれの国民生活をつよく把握してはいるが、その体制をつくりあげている上のエネルギーとしては、何か共通のものがある。

その一つとして生産力をみると、5世紀における日本や朝鮮半島では、生産を担ったトップに外国出身の技術者（渡来人）が目立ち、律令体制形成の生産力基盤の中心は渡来人であった。

『新撰姓氏録』に記録された氏族の約30%が渡来人に当たり、新技術を身につけた律令制形成期の新渡来人たちは、大化改新前の氏姓制下における品部（部民）に編成され、これは律令制下に引き継がれている。

『養老令』にある『医疾令』（現存27条）によって奈良時代の医療制度をうかがうと、中央の製薬部門は、医療機関である内薬司（中務省に属し、のち平安時代に典薬寮に合

併）と典薬寮（宮内省に属する）で行われた。

前者にあっては、薬生が諸薬を搗き篩うことを掌り、後者では、諸国から調する薬種を納め、供御・中宮・東宮・諸司で用いる草薬、製剤を配薬した。また、典薬寮には薬園師とその見習の薬園生がいて、薬性色目を知り、薬園諸草を採集した。

これら薬剤官の下に雑戸の薬戸が多数あって、薬草栽培に当たり、このほか薬餌としての牛乳を供御し、牛酪を製する乳戸があった。

これらの制は、『唐令』の制にきわめて近く、唐令では尚薬局に主薬12名、薬童30名を置くのに対し、日本の『養老令』では薬生10名を配し、『唐令』の薬園師2名、薬園生8名に対し、『養老令』では薬園師2名、薬園生6名だった。

製薬用具として典薬寮の備品は衡で、『延喜式』には、薬斗、薬升、鉄臼、鉄杵、鉄じ、薬刀、机、幔幕等で、破損したときは、省へ申請して交換してもらった。また篩や篩用の布、薬料紙、燃料用木炭、胡麻油、膏用の猪脂などが給せられ、丸・散・膏・煎などがつくられた。

地方の国郡司には採薬師をおいたが、薬物には動植物に限らず石薬（鉱物薬）もかなりみられる。これは唐医学の影響がうかがわれるし、律令制下の仏教隆盛による鉱産（仏像・仏具制作のため）の発展を背景にもつものだった。

中国本草書のテキストとしては、『集注本草』が採用され、これは平安時代に入って『新修本草』に代った。

医療制度全般については、山崎 佐『江戸

期前日本医事法制の研究』中外医学社(1953)の古典的名著があり、また新村拓『古代医療官人制の研究(典薬寮の構造)』法政大出版(1983)、同『日本医療社会史の研究(古代中世の民衆生活と医療)』法政大出版(1985)が豊富な史料を紹介していて有意義である。

律令制全般では、野村忠夫『増訂律令官人制の研究』吉川弘文館(1970)、同『古代官僚の世界(塙新書)』塙書房(1969)のほか『岩波講座日本歴史』所収諸論文が参考になる。

延喜式の薬物

『延喜式』は、律令の施行細則として律令の多種の式のうち現存唯一の完全法典として有用である。この式は、律令制の凋落期とされる10世紀の編さん(延長5年、927奏進)で、実際の施行は40年後の康保4年(967)だった。年中行事的儀式政治の細則に終始しているところに、政治の形式化がみえる。

この式にみえる薬物は、製剤が11種、草薬が59種で、大凡70種の薬物が当時の常備薬だったとみられる。

風土記の薬物

中央の官令にもとづいて、地方各国庁が所命事項を報告した『風土記』は、各国の物産品目を政府が貢献物として規定するための基礎資料調査だったから、当時の国産薬物を知る上に有用だが、残念ながら現存する風土記は完本がほとんどなく、唯一の『出雲風土記』に136種の豊富な産物名がみられ、その中では草類の63種が最も多く、これに次ぐ木類が20種で、これらはすべて薬用である。『延喜式』の年料雑薬として貢献すべく規定された出雲国53種のうち43種(81%)がここにみえる。

秋本吉郎『風土記の研究』ミネルヴァ書房(1963)の詳細な研究があり、上田正昭編『風土記』社会思想社(1975)には、『出雲

国風土記』の薬物を中心とした伊藤清司の論考が収められている。

正倉院の薬物

輸入薬物の伝世品として今日に伝わる貴重なものとして、正倉院薬物がある。それらは、当時の輸入薬物の調製された形状や貯蔵容器の一端がうかがえるし、それら産地(インド、ペルシャ、アラビアなど)からみても、当時の唐代発展にみる世界的規模の一級品だった。

遠志は数本を束にし、さらにそれらを白木の軸の周囲に掃状に束ね、大黃は乾燥するとき紐を通すために今日と同じように穴がうがたれ、臍密(密臘)も円板状にかため中央に孔があり、多数の紐でつながれている。

草木薬は、多く白施と白布の袋またはつつみに収められ、ある種の石薬、製剤、動物脂などは蓋付の陶製壺、錫製壺、木椀、木製合子などに貯蔵されている等々、具体的知見がみられる。

朝比奈泰彦編『正倉院薬物』植物文献刊行会(1955)、益富寿之助『正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究』(1958)などの研究書があるが、戦後間もない頃の研究なので、その後の技術革新による新手法により、また東南アジア方面の薬物資源調査による新知見を加え、さらに研究が続行されている。

なお正倉院薬物は、鑑真によってもたらされたものとする説があるが否定さるべきである。

この説は、『唐大和上東征伝』中の鑑真第2次出航の際の荷物目録中にある香薬類が、正倉院に納まる前の東大寺大仏に奉献された薬物の目録『種々薬帳』のそれに一致するものに多いことによったものだが、これら香薬類は鑑真が渡来する以前からかなりの量が輸入されていたもので、現存する各寺院の資財帳や買物申請帳にみえ、仏教儀式の焼香供養用や、衣服、文書香であって、鑑真にむすびつける必要のないものだった。

この点の詳細については、拙著『図説・日本医療文化史』思文閣出版(1989)を参照。

鑑真の医薬と丹薬盛行

唐風をまねた不老長生用丹薬流行が、奈良時代上流階級に流行していたことは、吉田光邦(科学史研究No.65, 1963)の指摘するとこ

ろであり、正倉院薬物中の紫雪・金石凌・石水氷などがかなり早い時期に消費されていることは、丹薬の解毒を主目的に用いられた可能性がある。

奈良・平安時代の神仏思想や丹薬の詳細についても、上記拙著参照。

【図書紹介】

宗田 一先生 監修編著による近刊3書

○ 医学近代化と来日外国人

幕末から明治期にかけて来日した所謂“お雇い外国人”その他の医学関係者については、今日までに多くの報告があるようで、まだまだ未知の事が山積している、という認識のもとで、主として日本医師学会所属の方々が分担執筆されたもの。宗田先生はその筆頭編著者。近時、外国人の母国での原史料発掘が相次ぎ、その成果もとり入れた研究成果の一部を分かりやすいスタイルで執筆したもの。

世界保健通信社刊 5,300円

○ 図説・日本医療文化史

宗田先生が、日本C.H.ベリンガゾーン(株)のNeue Informa誌に1979年よりの連載内容を再検討されたもの。

序説、呪術と素朴経験医術からはじまって

古代・中世5項目、近世8、近代11、合計25の大項目を文化史のなかで捉えたもの、美しいカラー図版をはじめ豊富な原資料によって楽しみながら医薬の歴史を学ぶことができる。大著ながら座右から離せない存在となる。

思文閣刊 25,000円

○ 医療と神々、医療人類学のすすめ

現在、大阪大学医学研究科博士課程在学の文化人類学者池田光穂氏の原稿を、医学史家の立場から宗田先生が指導・監修されたもの。

著者は1981年「医学史研究」誌上で、現在の医学史研究者が見せる〈進化主義—それは文化人類学で、とっくの昔に葬り去られたもの〉に我慢がならず投稿した、と書いておられる。われわれの視野を広げる好著。

平凡社刊 自然叢書 2,000円



会 員 名 簿 の 追 補

(1989年2月20日 現在)

— 一般会員 —

大木利勝	270 -15	千葉県印旛郡栄町竜角寺1028、県立房総のむら	(0476)95-3333
大橋清信	930	富山市稲荷町3-6-3	(0764)41-5618
南部直樹	142	品川区荏原2-4-41、星薬科大学	(03)786-1011
原田久美子	101	千代田区神田1-4-13新神田ビル、(株)東方書店	(03)233-4300
柳沢清久	120	足立区千住元町33-3	(03)881-5974
渡辺康	174	板橋区中台3-27、I-202	(03)936-0324

— 賛助会員 —

日本化薬(株)	102	千代田区富士見1-11-2	(03)264-1341
日本レダリー(株)	104	中央区京橋1-10-3、第一学術情報部	(03)562-0766
日本新薬(株)東京支店	103	中央区日本橋本町3-5-14	(03)241-2151
協和発酵工業(株)	100	千代田区大手町1-6-1、医薬学術部	(03)282-0065
佐藤製薬(株)	140	品川区東大井6-8-5	(03)298-3010
帝国臓器製薬(株)	107	港区赤坂2-5-1、企画促進部・企画課	(03)583-8362
養命酒製造(株)	150	渋谷区南平台町16-25、広報部	(03)463-5781

— 住所変更 —

小林正夫	190	立川市栄町5-30-6	(0425)36-6855
東丈夫	546	大阪市東住吉区鷹合4-12-20-301	
水谷米	223	横浜市港北区新栄町14-1-231	(045)592-8253

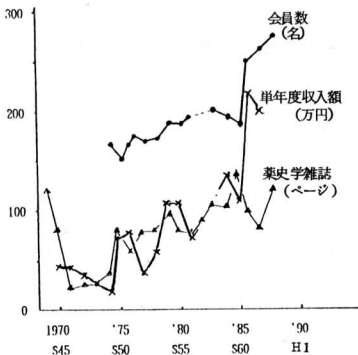
— 退会会員 —

大西博	大村良彦	毛塚和男	狐塚識夫
滝浦潔	曳野宏	真庭輝嗣	吉田一郎

編 集 後 記

下表は、本学会ここ20年間の活動状況の推移です。

会員数については、長いこと200名の水準



を突破できませんでしたが、280名にまで達しました。医学・工学系では、会員500名になると、学術会議会員を推薦できる資格が得られますので、拡大目標をそこに置いて頑張るつもりであります。

単年度収入額は、会費および事業収益ですが、之も85年度以来200万円に急増しました。

薬史学雑誌ページ数については、徐々に上昇しては来ましたが、前2者に比べると未だし、の感があります。89年度の活動重点は、この辺に置かれるべきもの、と会長以下幹事の間では考えております。 (K)